六年

桃花片

中　真　先生指導

第一次指導　第一時

（児童二十三名）

○　鉛筆を一本出して、今日読む桃花片のところにはさんでください。下敷きは、今日書くノートのところにはさんでください。筆箱は机の中に納めましょう。

○　おはようございます。

おはようございます。

○　一昨年この学校で勉強させてもらいました。その時に、一年生から六年生まで矢本東小のみなさんは、ようく考えて本気で勉強する、すばらしいみなさんだと思いました。今日は、とっても楽しみにしてやってきました。よろしくお願いします。

よろしくおねがいします。

一　よむ

○　桃花片という、とても長いお話なんですが、家で読んでみた人、手を挙げてごらんなさい。

（大多数挙手）

○　さすがだねえ。読んでこなかった人、心配しなくていいよ。分かるようになります。

（読んでこなかった子ども、うなずく。）

○　読むところに番号を打ちます。

〈区画〉

1　百八ページ　初め　ろくろが
2　百十ページ　八行目　春になると

（2を三人で読むため、○をつける）

○　百十一ページ　十行目　家の裏手
○　百十三ページ　九行目　かまの火を止めて
3　百十四ページ　十三行目　お父さん
4　百十六ページ　四行目　毎日
5　百十八ページ　四行目　かまの中の
6　百十九ページ　二行目　その父が死んで
7　百二十ページ　六行目　春がめぐってくるたびに

○　読む順番、決まってますか。

（――――）

○　それでは、一番後ろのあなたから読みましょう。九人で読んでもらうことになります。明日は、その次の人から読んでもらうことになります。

（読む順と番号を確認する。）

○　読む人は、ゆっくり、はっきり、大きな声で読んでください。今、後ろの人がとっても上手に本を持ってます。聞く人はきちんと本を起こして読むとお話がよく分かります。

○　読む人は、立って読んでください。いい声が出ます。次の人は、前の人が終わりそうになったら、立って準備をしてください。

（順繰りに、九人で読む。）

○　素晴らしい六年生です。感心しました。よく読みましたね。特に感心したのは、読み間違いをしたときに、きちんとそこを直して読んでいること、考える力がないとなかなかできません。りっぱですね。

（時間二十八分）

二　とく

○　桃花片というお話です。
（題目　板書　桃花片）
（板書　桃に小丸　黄チョーク）
○　桃（とう）というのは何のことかみんな分かるでしょ。
　もものこと。
○　花（か）というのは、何のこと。
　はなのこと。
○　じゃ、花片（かへん）といったら、何のこと。
（板書　花片に傍線　黄チョーク）
○　花びらのこと。桃の花びらのことね。桃の花びらというのはとっても美しい。みんなは、絵に描いたのを見たことないですか。自分で書いた人いませんか。なかなか難しいでしょ。この美しい色が何につけてあったんですか。
　水滴です。
○　そう、水滴についてました。
○　誰がつけましたか。
（多数挙手）
○　おお、すごい。
　お父さん。
○　そう、楊のお父さん。父親だね。
（板書　父）
○　楊の父親は、この水滴の他にどんなものを作っていましたか。
　ふだん、使うもの。
○　そう、すごいね。
（板書　使　黄チョーク）
○　ふだん、使う焼きものを作っていましたね。花を生けるつぼだとか、すずり箱とか、お茶わんとか。そういうお父さんを小さいときから見て、大きくなったら、教えてもらったのは誰ですか。
　楊です。
○　楊ですね。お父さんにとっては何ですか。
　むすこです。
○　息子だね。子どもです。
（板書　子）
○　お父さんは、ふだん使うものを作っているんだけど、子どもの楊は何を作りたかった。
　お父さんと同じものが作りたかったんですか。
　楊は、見て楽しむような、観賞するものを作りたかった。
○　ああ、そうね。うまいことというね。簡単に言うと、何と言うか知っていますか。使わないで…。
（板書　かざり　黄チョーク）
○　かざっておくだけでした。すると、あなたが言ったように、「わあすごいな」って鑑賞できるものね。
○　お父さんが、楊に作ってほしかったものは、何ですか。
　お父さんと同じ、使うものを作ってほしかった。
○　お父さんは、（板書　使から子に　黄チョーク）自分と同じように子どもの楊にも、使うものを作ってほしいと思っていたのね。
○　ところが、子どもは言うことを（板書　上に△　黄チョーク）聞かなかった。そうして、お父さんよりもっといいものを作るんだと、ものすごく頑張ってお仕事をしたでしょう。その結果、何と言われる

ようになりましたか。
名人です。
（板書　名人　黄チョーク）
○ 名人と呼ばれるようになりました。そして、どんなものを作りましたか。
赤絵のかざりつぼ。
○ すごいね。ただのかざりつぼじゃないの。血のしたたるような、赤い赤い赤絵のかざりつぼね。
（板書　赤―　黄チョーク）
○ お父さんよりもいいものを作ろうと思ってやってきたら、赤絵のかざりつぼもできるようになったし、名人と言われるようになったし、楊は、これでもう満足だと思いましたか。
（――――）
もう満足。もうすることはないと思いましたか。満足したか。しないか。
しなかった。
○ （板書　黄チョーク）本当にいいものを作ってないんじゃないかなって。
○ 何才ぐらいのときですか。
六十才ぐらい。
○ 六十才ぐらい。（板書　黄チョーク）そのときに、しきりに誰のことを考えるようになったの。
お父さん。
○ そう。（板書　子から父へ←　黄チョーク）お父さんのことを考えるようになりました。そうして、一生懸命また仕事を頑張ったのね。そのときに、楊が、出合ったものがあるでしょう。何に出合いましたか。
まだ、いいもの作ってないんじゃないかな。お父さんよりもうまくできるのかな、すごく考えたり、お仕事を頑張っているときに、楊が出合ったもの。六十を過ぎて。
桃花片の水滴。
○ そう、桃花片の水滴ですね。お父さんがこの水滴を作ったことを、楊が知った時、どんな気持ちでしたか。
おどろいた。
○ ただ、「えっ」というような驚き方じゃないの。本当に驚いた。心臓が止まるほど驚いた。
○ だって、それまで、楊はお父さんのことを何と思ってた。
ただの職人。
○ そう、職人だけじゃない。『ただ』の職人とおまけがついている。
（板書　職人　黄チョーク）
○ そう、思ってやってきたのね。だから、本当にびっくりしたでしょう。そして、楊がそのとき初めて分かった。お父さんの何が分かった。
○ 世にもまれな名器といわれる桃花片の水滴は、お父さんが作ったものと分かって本当にびっくりした。
もう一つお父さんについて分かったことがある。何。
（子ども達、しばらく考えている。）
父親の偉大さ。
○ すごい。（子ども達に）聞こえた。
（子ども達、うなずく。）
○ ただの職人と思っていたのに、なんてすごい仕事をする、りっぱな

お父さんなんだろうと思った。そういうお話なんだね。

〈手引き〉

○　これから、お仕事をしてもらいます。七つに分けましたね。

（板書　ゆっくりと大きく一本線、七つに区分して番号を打つ。）

（子ども達、先生の板書をしっかり見ている。）

○　楊が一生懸命仕事をしていることや、楊の父親がどんなことを楊に伝えたかったのかな、ということなんかを考えながら、仕事をしてほしいな、と思います。

それぞれのところに、楊の作ったものが書いてあります。それを書いてもらいます。

（時間十六分）

三よむ

四かく

○　1番、いっしょにやってみましょうか。何を作りましたか。

大皿です。

（板書　大皿）

○　大皿。もう一つある。

つぼです。

（板書　つぼ）

○　あと、家へ帰って、考えてみてください。

○　今日は、ノートを使わなかったけれど、ノートの上に番号をふって、書いていくといいですよ。

○　今日は、初めての、ほんとに長いお話だったんだけど、すごく本気で勉強ができて、先生も気持ちがよかったです。明日も楽しみにしています。

（礼）

（時間三分）

（授業時間四十七分）

〈板書事項〉

第一次指導　第二時

（児童二十六名）

○　おはようございます。
　　おはようございます。
○　昨日は素晴らしい六年生らしいお勉強ができましたね。他の先生方もしっかりした六年生だと言って、ほめておられました。
○　水滴を見たことありますか。（水滴を見せながら）こういうのですね。ここのところから水を入れて、ここから出します。
○　昨日、家へ帰って桃花片のお話を、読んでみた人、手を挙げてください。
　　（大多数挙手）
○　もう一つ、お願いしておきましたね。楊が作ったものを考えながら書いてみてくださいと言いました。書いてみた人、手を挙げてごらんなさい。
　　（多数挙手。）
○　いいですね。書けなかった人も心配することないですよ。
○　昨日、書いてきたところを見せてもらいますから、ノートを開いてください。私が回っている間、本を読んで待っていてください。
　　（机間巡視　一人ひとりのノートをていねいに見る。）
　　（子ども達、静かに黙読）
　　（時間七分）

三よむ

四かく

○　ノートを見せてもらいましたが、みんな一生懸命まじめに頑張っていましたね。全部できなくても、途中までででも頑張るということが素晴らしい。それだけ力になります。
○　みんなで一緒にやっていこうと思います。1番のところは、昨日みんなで一緒にやりましたね。楊が作ったもの。二つあったけど、何でしたか。
　　（多数挙手）
　　大皿とつぼです。
○　七つに分けました。見ていてください。
　　（板書黒板いっぱいに一本線、七区分し番号を打つ。）
○　1番は大皿とつぼでした。
　　（板書　大皿　つぼ）
　　（子ども達、背筋を伸ばして真剣に板書を見る）
○　2番のところは長いけど、何でした。
　　はちです。
○　おお、よく見つけたね。素晴らしい。
　　（板書　はち）
○　3番のところは、分かりましたか。これね。作る前の仕事、これやらないと、ものができないの。
　　土をもんでいた。
○　そう、すごいね。簡単に書きますね。
　　（板書　もむ　黄チョーク）
○　これね、最初にやる仕事で、土をもむんです。
○　この、土ってどんな土か分かる。校庭なんかの土。
　　粘土。
○　（子ども達に）聞いた、今の。

○　これね、粘土というの。焼き物を作るときにとても大事で、教科書には陶土と書いてあります。
○　この粘土をもむんです。そうすると、初めは冷たくて、固かった粘土がもんでもんでいくと、何になるの。
　弾力性のある温かいかたまり。
○　おお、さすがだ。
　（板書　温かいかたまり）
○　もんでもんで、何回ももんで、中の空気を出すんだって。そうしないと、焼いた時にこわれてしまうそうです。大変なお仕事なんですよ。
○　温かいかたまりになって、それが上手になって、その次に、今度は、ろくろを回す仕事があります。ろくろを回してできたものを、楊が作ったでしょう。何ですか、４番。
　つぼです。
○　そう、つぼ。
　（板書　つぼ）
○　そうして、やっと、ろくろを回して、つぼの形ができる。
○　その次の５番のところ。作ってはこわし、作ってはこわし、したでしょう。こわす前の形は何でしたか。
　つるくびの水差し。
○　そう。
　（板書　水差し）
○　これね、どういう仕事か分かりますか。形ができますね。その次に焼くんです。この焼くのがうまくいかないと、いくら美しい形ができても、ものにはならないのね。
○　６番のところ、楊が作ったもの、何でしたか。
　赤絵のかざりつぼ。
○　そう。
　（板書　赤絵のかざりつぼ）
○　７番はね、ここは楊の作ったものはなかったんです。お父さんの作ったものはあった。それを括弧書きで書いてくれているのもあって、びっくりしました。
○　これ（大皿～赤絵のかざりつぼ）が、楊の作ったものです。
○　それでは、鉛筆をノートにはさんで、教科書は、時間があったら後で読んでもらうので出して、他のものは、机の中に入れてください。教科書は、閉じて机のまん中に置いてください。
　（時間十三分）

五よむ

○　それでは、黒板を読んでもらいます。次の人、立って、大きな声で読んでください。
　（子ども　緊張している様子）
○　（笑顔で）緊張するね。いいよ。緊張しなくて。
　（個読　一人　精いっぱいの声で読む。）
　（時間一分）

六とく

○　ここ（７番）はなかったので、丸をしておきます。
　（板書　７番に○）
○　ここ（４番）は（板書　ろくろ　黄チョーク）ろくろを回して形にするところね。

○　ここ（5番）はなかなかむずかしい。（板書　やく　黄チョーク）
　焼くところね。
○　今、書いたところで、楊がお父さんから習ったこと、というのはどこ。お父さんに教えてもらったこと。
　　やく。
○　あ、そうだ。まだあったでしょう。
　　ろくろ。
○　これもあった。まだあったでしょう。一番大事なこと。
　　土を…。
○　土をもむこと。いきなりここ（やく）へ行ったら、具合悪いでしょう。だから、一番最初に土をもむことを教わった。そして、ろくろを回すことを教わって、焼くことを教わったのね。
○　この三つの中で、楊が一番得意だったこと、上手だったのは何ですか。
　　ろくろです。
○　これ、上手だったね。名人級だったでしょう。
　　（板書　つぼ　の上に○　黄チョーク）
○　もう一つ上手なものがあるの。
　　もむことです。
○　そうそう。（板書　温かいかたまり　の上に○　黄チョーク）これも上手なのよ。
○　だけど、さすがの楊もむずかしい、困った。どこ。
　　焼くことです。
○　そう、これは（板書　水差しの上に△　黄チョーク）むずかしいね。何年もかかる。
○　ここの（板書　３４５を括弧でくくる　黄チョーク）一生懸命習っているところは、だいたい年でいうとどのくらい。みんなくらい。ちょっと上。
　　二十才ぐらいです。
○　すごいね。二十才とは書いてなかったけど、何と書いてあったか。漢字二文字で書いてあったね。二十才くらいのことを別の言葉で書いてあったね。
　　（板書　４の右に　若―　黄チョーク）
○　これ、二十才くらいなんです。
○　もう一つ、楊が、お父さんから口ではなかったけど、見て教わったことあるよ。どこ。
○　苦労も何もしないで、お父さんを見て、できたもの。
　　（子どもが、３番～５番を答えたので）
○　ここ（３番～５番）は若者のときのことです。楊が一生懸命修行しているときのことです。
○　若者のところより他のところで、楊がお父さんを見て、教わったものあるのです。
　　はち。
○　そうです。はち。だいたい年、いくつくらいですか。漢字とひらがな。
　　幼い時。
○　そうそう、これは、楊が幼い時。
　　（板書　２の右に幼、２を括弧でくくる。　黄チョーク）
○　楊は、一生懸命働くお父さんを見て育った。お父さんは、髪の毛がじりじり燃えるのだって、気がつかないくらいだったでしょう。その

そばで、お父さんがいろんなものを作ったり、うわぐすりをかけたりするのを、一日見ていても飽きないのね。お母さんがいないけど、さびしいなんて思わない。小さいうちから、楊は焼き物を作ることを見て、知ってたんだね。

そうして、お父さんから土をもんで、ろくろを回して、次に焼いて、そういうのを教わっていきました。そうして、やっと、つぼや大皿を作ったのは何才のときですか。

六十才のとき。

○　そうです、これ六十のとき。

（板書　1の右に　　1を括弧でくくる。　黄チョーク）

○　（３４５を指し）二十才ぐらいでしょう。（1を指し）六十才でしょう。何年経っている。

四十年。

○　四十年ですよ。たいへんな年数。それを、土をこねてこねて、ろくろを回して形を作って、こんどは焼いて、その繰り返しを四十年。でもここで終わらないんだよ。まだまだ、続けて、赤絵のかざりつぼを作ったのは、何才くらい。

（――――）

（板書　6の右に　　黄チョーク）

○　六十過ぎて、（両手を大きく使ってつぼを表現）とっても大きな、とっても華やかな、りっぱな赤絵のかざりつぼを作るようになって、みんなが楊と呼ばないで、何と呼ぶようになったのですか。

名人。

○　名人（板書　6番に　名人　黄チョーク）と呼ぶようになりました。

○　そうするとね、これはまた、大きなお屋敷のりっぱなお部屋に置かれるのね。そして、訪ねてきた人は、なんてりっぱなかざりつぼなんだと思って、裏を見たときに、誰の名前が書いてありましたか。名前はちゃんと書いてあるの、名人は。

○　誰の名前が書いてあるの。赤絵のかざりつぼに。

楊の名前。

○　そう、楊の名前が書いてある。そうするとね、たいへん値打ちが出て、ものすごく高い、みんなのお小遣じゃ買えない。千円、一万円じゃないの、何十万、何百万。そうすると、なんと高い、りっぱなつぼを作ったそうだと、みんなうわさをするでしょう。どんどんうわさが広がっていって、楊はほんとに名人になった。楊の作ったものは、ものすごい人気が出る。

○　じゃ、楊のお父さんは、自分が作った、焼いたものに何かしませんでしたか。

特に気に入った作にだけ刻印をつけてた。

○　ふだん使うものを作っていたお父さんですが、これは素晴らしい、特にりっぱにできたという作品には、刻印というもの、きざむと読むね。これをつけた。

○　何でつけたか。どこでつけたか。

つめです。

○　そう、この親指の爪で、（爪で刻印をつける動作）ちょっとつけたのね。楊のように名前は書かないのですね。

○　このお父さんの刻印をつけたものが家に残っていますか。

あります。

○　おお、残念でした。

ない。

○　ないんです。だって、お父さんはそういうものを全部売らなきゃならなかったでしょ。だって貧しいもの。どんなに気にいってもね。

○　だけど、お父さんが楊のために遺しておいたものが二つあるの。お父さんだけが作ったものではない。お父さんと楊がいっしょに作ったと言えばいいかな。

楊が絵付けをしたかざり皿。

○　一つはお父さんが作って、楊がヘラで絵を描いた。絵付けをした小さなかざり皿。これが一つと。

（板書　6番に　か―　黄チョーク）

○　これ、何才の時に作ったんですか。

九才のころ。

（板書　か―の下に　黄チョーク）

○　みんなより小さいですね。三年生のころに楊が絵付けをしたのね。

○　もう一つあります。これは、楊がろくろで形を作って、お父さんが焼いてくれた。何。

（板書　6番に　白　黄チョーク）

白磁。

（板書　白の下に―　黄チョーク）

○　白磁の水差し。白磁というのは白い。真っ白。他の色は何にもついていない。何の模様もない。何のかざりもない。その白磁の水差し。その二つをお父さんが遺してくれたものですね。これが気になりだしたのが、楊が何十才になったころ。

（――――）

○　白磁の水差しは、（板書　白―の下に　黄チョーク）ちょうど楊が二十才のころですね。お父さんは、楊のために遺してくれたんだけど、楊は、若いときはりっぱな、華やかなものを作るのに一生懸命だったでしょう。だから耳を貸さなかった。赤絵のかざりつぼを作るようになって、みんなが名人と言うようになって、そうかな、という思いとともに、気になり始めた。

○　それから、もう一つ、お父さんが楊のために遺してくれたものに、楊は出合っているのです。どこで出合ったか、何番で出合ったか分かる。これはお父さんのです。

7番だと思います。

○　そうですね。楊が作ったものは書いてないんですが、何に出合ったんですか。

桃花片の水滴。

（板書　○の上に水　黄チョーク）

○　桃花片の水滴に出合ったのね。そのときに、楊は、もう、自分は高いりっぱなものを作る名人だと思っていたけども、お父さんの小さな水滴を見て、ああ、自分は、まだまだだなあ、と思ったのね。

○　まだまだ、お父さんにはかなわない。ということは、楊はお父さんの何が分かったか。

（――――）

○　あの水滴を渡してもらったとき、漢字一つで。お父さんの何が分かった。

（板書　7番　○の中に心）

○　やっとこの時に、お父さんの心が分かったのではないかな、と思います。

○　ここ（板書　67を括弧　黄チョーク）のところは六十過ぎたところね。

○　楊は焼き物を作ることをやめたでしょうか。それとも、作り続けたでしょうか。

（時間二十二分）

七よむ

○　時間が短いので、本を読まないのは残念なんだけど、これ（板書）最後に読んで終わりにしましょう。大きい声で読んでね。姿勢はいいですか。

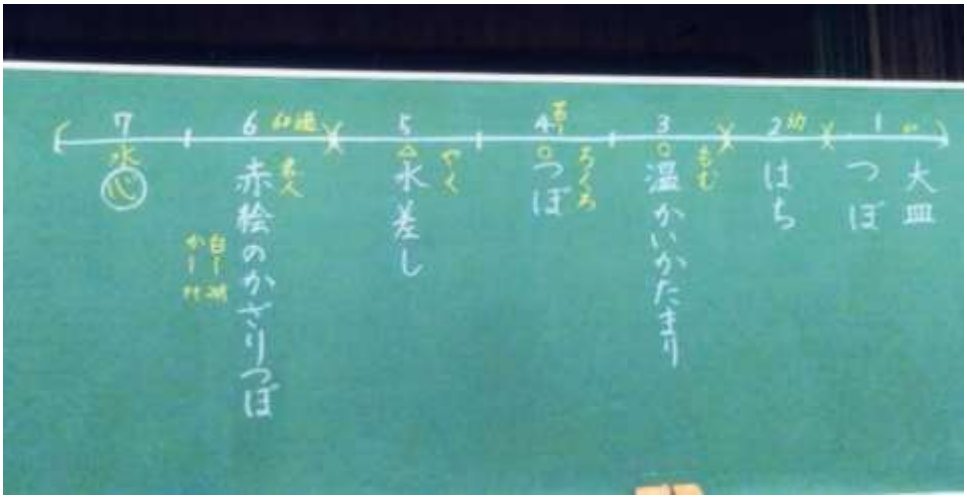
（子ども達、腰を立てる。）

（指音読　一回）

○　この二日間、日本一の六年生と勉強して嬉しかったです。ありがとうございました。終わりましょう。

（礼）

（時間一分）

（授業時間四十四分）

〈板書事項〉